

編集後記

今号の『哲学の探求』も何とか発行にこぎつけることができました。私のような不慣れな怠け者が編集担当でありながらもなんとか発行にこぎつけることができたのは、何よりも執筆者の皆さんをはじめとする若手ゼミ参加者諸氏のパワーの成せるわざでしょう。しかし、歴代世話人の方々、ご支援下さったOB・OGの皆さん、この平成大不況のもと、例年同様の高品質・低予算で印刷を引き受けていただけた今日和印刷さん、他多くの方からのご支援のお陰でもあります。この場を借りてお礼申し上げます。

さて、今号は掲載された報告・論文の数が例年に比べてやや少なく、若干寂しい感もありますが、中身は今回の若手ゼミの盛り上がりを彷彿とさせるものになったのではないかと自負しています。執筆者の皆様には渾身の力作をお寄せいただき、編集者としても有り難い限りです。

本誌に掲載されたもののほかに、当日は以下の研究発表が行なわれ、いずれも活発な議論がくり広げられました。

・『純粹理性批判』の「経験の類推」における

客観性の認証 高橋 晃（早稲田大）

・本居宣長と富士谷御杖の言語論を読む

畑中 健二（東北大）

・人間と言語

鬼界 彰夫（筑波大）

・カントの最高善について

清水 明美（早稲田大）

・デュルケーム社会学理論と民主主義の理論的基礎

菊谷 和宏（一橋大）

・「生まれてこないほうがよかったのち」とは？

土屋 貴志（杉野女子大）

・フィヒテ自然哲学の基底

木村 博（法政大）

本年1月に、第20回若手ゼミの世話人であり、本誌19号の編集者もつとめられた石井稔氏が急逝されました。この場で哀悼の意を表します。

こうした哀しいことがあると、陳腐な表現ですが、人との出会いの貴さ、喜ばしさを思わずにはいられません。また来年の夏、皆さんとお会いできることを。

（橋本）